

2023  
11



写真①完成した作品

注目作家紹介プログラムチャンネル14「吉本直子いのちをうたうー衣服、痕跡、その祈り」展開連 こどものイベント  
「ザ・バード・メーカーズ・プロジェクトー同じ空の下でー”自分の服で鳥を作ろう！”」

- 開催日時：2023年11月5日(日)10:30～15:30
- 参加者：こども7名、大人8名
- 対象：小学3年生～高校生
- 場所：アトリエ1・2、ホワイエ

■概要

展覧会作家の吉本直子さんと展覧会を鑑賞した後、自分の古着を使って鳥の作品をつくり、その服との思い出を手紙に書きました。

■1 学芸員と吉本さんによるレクチャー

展覧会担当の遊免学芸員が「吉本さんは兵庫県の作家で、人が着た服を圧縮して作品にしている」とお話ししました。

吉本さんは「古着を素材としている理由は、その人が生きていた時間が物語として残っているように感じられ、尊さや愛おしさ、苦しみや喜びなどを共有できるから。古着には1人ひとりの物語があるけれど、古着だけでは本当の物語はわかりません。実際につくってもらうことでその物語に触れることができると思いワークショップをしています」と伝えました。



写真②レクチャーの様子

◇こどもの感想（※原文をそのまま紹介）

- ・はじめてやったおさいほうをボランティアさんやスタッフさんがてつだってくれてたのしかったです。(小3)
- ・すてきな鳥を作れてうれしかったです。(小4)

◇保護者の感想

・すぐに小さくなってしまふ子どもの服、このような形で残すことができ、とても嬉しかったです。息子も初めてのお裁縫、ボランティアの方々に教えていただき出来るようになり、大変良い経験になりました。

■2 鑑賞

吉本さんと一緒にアトリエ1の吉本さんの作品を鑑賞しました。壁一面をしめる大きな作品が、なんと白いシャツでできていてびっくり！「白いけど、色が少しずつ違う」「タグが付いているよ」「なんだかい匂いがする」など、気づいたことなどをお話しました。また、「どれくらい時間がかかったの?」「大きさはどれくらい?」など、気になったことを直接吉本さんに聞くこともできました。

次に、鳥の作品が展示されているホワイエに移動して鑑賞しました。オーストラリアで開催されたワークショップでつくられた黒い鳥やカラフルな鳥などさまざまな作品が展示されていました。



写真③ 鑑賞の様子

■3 制作

いよいよ自分の古着を使って制作していきます。まずは何種類かの鳥の型から自分のイメージに合うものを選び、服のどの部分を羽や胴体にするか考えながら型どりしていきました。型がとれたら、羽と胴体それぞれの表裏をぬっていきます。裁縫をするが初めての人もたくさんいて、針穴に糸を通すのも一苦労の様子でした。保護者の方やボランティアさん、吉本さんにも手伝ってもらいながら縫い進めていきました。縫えたら羽や胴体の形に沿って切り、切れ端を中につめてふくらませて羽と胴体をつなぎ合わせました。布がやわらかいのでごったりした感じでしたが、最後に針金を入れると翼をピンと広げて飛んでいるようになり、「生き返ったね!」とみんなで盛り上がりました。



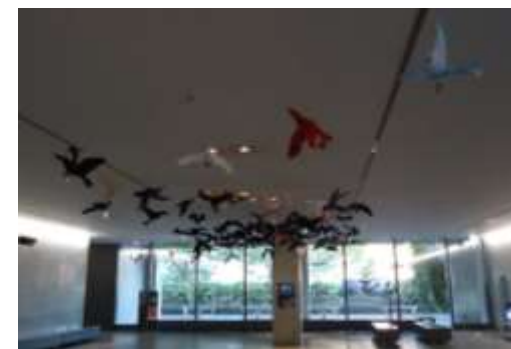
写真④ 制作の様子

■4 ふりかえり

作品を見せながらそれぞれ今回、鳥になった服について書いた手紙を読んでもらいました。

「サッカーをする時に初めて買ってもらった服でつくった」「お母さんが夏に着て破れたワンピースの表地・裏地で姉妹の鳥をつくった」「コロナ禍に一度も着れず小さくなってしまったおじいちゃんに買ってもらったアロハシャツ。こうして使ったことで心が晴れた」「お父さんのワイシャツ。中につめる切れ端がちよっと少なめだったけど、針金を入れて糸をつるすと羽がはばたいているように見える!」

制作した鳥とお手紙は後日展示され(写真⑤)、個性豊かな仲間が増えてにぎやかになりました。



写真⑤ 展示風景

□展覧会担当からのコメント

裁縫は小学校5年生で習うようですので、小学校3～4年生のこどもたちにとっては大きな挑戦となりました。みんなの思い出の詰まった服は、立体的な鳥へと姿を変え、ホワイエで自由に羽ばたいていました。1羽1羽が持つ記憶や思いに触れることで、それぞれの鳥が私にとっても特別な存在になりました。今回制作していただいた鳥の作品とお手紙は吉本さんの作品の一部として生き続けます。またどこかで鳥の群れに会える日まで元気ですね!

(遊免学芸員)